

道元禪師における「自未得度先度他」について

星 俊 道

今回、本小論をまとめるに至ったきっかけは、駒澤大学助教石井清純氏の論攷「再び『現成公案』について」中の、

さらに、自らが完成者としての意識を持つことがない、という観点からすれば、禪師晩年の変化とされる自未得度先度他の坐禪も、この延長上に位置づけることが可能となるのではなからうか。¹⁾

という一文に何かひつかかるものを感じたからであつた。

この問題に関しては、昭和六十二年に、駒澤短期大学助教授角田泰隆氏が、その論攷中で、

菩提心とは「自未得度先度他」の心であり、これを実践することに他ならない。道元禪師が専ら習つたという「道心」とは、自己が道を得ることではなく、衆生を濟度することであつたのである。²⁾

と述べられたのに対し、駒澤短期大学教授袴谷憲昭氏が、

極めて簡潔な言い方をすれば、「本覚思想」とは、当人の知りもしない「本覚」という悟りの「御墨付」を振り翳すことによつて仏教徒であることを止めてしまった人の思想である。それゆゑ、「本覚思想」からは、自ら「自未得度先度他」の発願を起そうという

印度學佛教學研究第四十八卷第一号 平成十一年十二月

ような信が生じてくることは決してありえない。角田泰隆氏が：(中略)；、拙稿を取上げながら、右のような簡単なことも知らずに、自分勝手な非論理的批判を展開しているが、角田氏は、「濟度衆生」という道元の本意が、本覚思想批判によつて始めて「自未得度先度他」として展開したということを全く理解していないのである。この語が十二巻本において初めて現われることの意味の重大さを角田氏にはもつと虚心に考えてもらいたい。³⁾

という痛烈な反駁をされたのが強く印象に焼き付いているのだが、十二年を経た現在に至つてなお石井氏が言及されるところをみると、未だ解決していない問題らしい。

それでは、道元禪師の真意が何処にあるのかを『正法眼蔵』「発菩提心」によつて見ていくことにしたいと思う。

禪師は、『涅槃經』から、

発心畢竟二無別、如是二心先心難。自未得度先度他、是故我礼初發心。初發已為天人師、勝出声聞及緣覺。如是發心過三界、是故得名最無上。⁴⁾

道元禪師における「自未得度先度他」について（星）

「という偈を引かれ、まず、「発心」について、

発心とは、はじめて自未得度先度他の心をおこすなり、これを、初
發菩提心、といふ。^⑥

と拈提される。ここで注目すべきなのは、「はじめて」・「初」という点である。この「発心」に対応するのが「畢竟」であるが、これについては、

いはゆる畢竟とは、仏果菩提なり。^⑦

と一旦述べられた後、

たとひ、ほとけになるべき功德熟して円満すべし、といふとも、な
ほめぐらして、衆生の成仏得道に向向するなり。^⑧

とも述べられる。これは、全ての衆生の救済のために精進し、
自らは成仏しない「大悲闡提」の思想である。「仏果菩提」に
おける「心」では意味がはっきりしないが、「大悲闡提」の
「心」であれば、それは「自未得度先度他」ということが明
確になる。それを裏付けるのが次の一文である。

阿耨多羅三藐三菩提と初發菩提心と格量せば、劫火・螢火のごと
くなるべしといへども、自未得度先度他のころおこせば、二無
別なり。^⑨

この部分については、過去何度も言及しているが、刹那にお
ける「自未得度先度他のころ」を共通ベクトル成分として
とらえた場合は、たとえそれが初發心の菩薩と功德を積んだ
「大悲闡提」とであつても、両者に何らの差異はないことに

なる。

さて、ここまでで、道元禪師が最も強調されたかったこと
は何であろうか。「自未得度先度他」の思想なのだろうか。私
はそのようには考えない。もう一度最初の偈に目を転じてみ
よう。

ここで説かれているのは、要約するならば、「発心」と「畢
竟」とは同じものだが、「はじめて」の「発心」のほうが難
しいから尊ばれる、という点に尽きるのである。一見、「初
發心」のみが「自未得度先度他」であるから重視するとこれ
なくもないのであるが、「大悲闡提」の「心」であつても「自
未得度先度他」であることには変わりがないのであるから、
それは成立しないことがわかる。つまりここは、禪師が仏道
の初心者に向けて、初發心の重要性を説いておられるととる
のが相応しいのである。この見方は従来の伝統宗学的『十二
卷本正法眼蔵』解釈と一致する。^⑩

それでは、袴谷氏が主張されるように、「本覚思想」から
「自未得度先度他」は決して生じないのであろうか。

これについては、船岡誠氏の「道元禪師における自利利他
の論理構造と冥合の論理」が重要な示唆を与えてくれる。船
岡氏によれば、道元禪師にとっては「自利」と「利他」は相
即の関係にあるという。そのことを考えるために、再び冒頭
で取り上げた石井氏の論攷を見てもいいでしょう。石井氏

がここで問題とされたのは、坐禅と悟りの関係であるが、それを更に直接的に言えば、人と諸法の関係である。

石井氏は、駒澤大学教授松本史朗氏の指摘された不合理に答えるべく腐心され、結果的に一見「認識論」と見紛うような仮説を立てておられるが、そうならざるを得なかつたのは、「悟り」を「完全なる状態」と位置付けてしまったためにほかならない。

それでは、「悟り」を「働き」に置き換えた場合はどうであろうか。

石井氏風に箇条書きにするとこうなる。

①ある人が坐禅をすることにより諸法に働きかける。(この働きが「悟り」)

②諸法がある人に働きかける。

③①と②は啐啄同時であり、時系列は存在しない。

④ある人に働きかけられた諸法は、別の人も働きかける。

⑤別の人も坐禅をして諸法に働きかける。(「悟る」)

⑥①②の働くと④⑤の働きも同時であり、両グループ間にはやはり時系列・順番といったものは存在しない。つまり別の人の坐禅により、諸法がある人に働きかけているともいえるのである。

ある意味でそれは「予定調和的」かつ「同時多発的」に起こるものであると言えよう。¹³⁾

道元禪師における「自未得度先度他」について(星)

この場合、①②の面を見れば「自利」となり、④⑤の面を見れば「利他」となることは容易に理解できると思う。

「ある状態」ではなく、「働き」という形でしかとらえることができないのが「悟り」なのであり、その「働き」が存する「場」が「如来蔵」であると私はとらえている。これは「本覚思想」である。だが、袴谷氏の定義される(限定された中古天台本覚法門から一般論へと拡大解釈された感のある)「本覚思想」とは相容れないことはいうまでもなからう。

先程の箇条書き中の「坐禅」を「発心」に読み替えた上で、「発菩提心」の次の一節を見てもらいたい。

衆生を利益す、といふは、衆生をして自未得度先度他のごころをおこさしむるなり。自未得度先度他の心をおこせるちからによりて、われ、ほとけにならん、とおもふべからず。¹⁴⁾

あるいは、

もし一刹那、この菩提心をおこすより、万法みな、増上縁となる。の「菩提心」を「坐禅」に読み替えてみてもかまわない。このようにすれば、「辨道話」における道元禪師の論理構造と、「発菩提心」におけるそれが全く同一であり、いささかの齟齬すらもきたさないことがわかるのである。

鎌倉行化直後に示衆された、いわゆる「尽未来際吉祥山不離誓約」においても、

以此功德先度一切衆生、見仏聞法而落仏祖窟裏、其後永平打開大

道元禪師における「自未得度先度他」について（星）

事坐樹下破魔波旬成最正覺。⁽¹⁶⁾

との記述を見出すことができるため、これを『十二卷本』の執筆時期と関連付けて解釈しようとする向きも見受けられるが、各巻の著された年代が書誌学的に立証されたわけではない上に、発心を「百千万発」繰り返すところが、道元禪の真髓なのであるから、全く説得力をもたないといえよう。（ついでに述べるならば、鏡島元隆博士が問題にされたこの部分の「打開大事」と「悟り」との関係については、拙稿⁽¹⁷⁾で言及済みである。）ここで、あらためてこの問題の淵源をたどってみると、実は、家永三郎氏の「道元の宗教の歴史的 성격」がもたらした影響が大きいのではないかと推察される。

この出家主義の強調される限り、宗教の国民各階層への普及、现实生活への浸透と言う様なことは全く問題外であった。⁽¹⁸⁾

このようなネガティブなとらえ方に対する護教的反動と、

初期の大乗經典で説かれる菩薩の理念をさらに推し進めたのが、
（中略）…大悲闡提と呼ばれる菩薩である。…（中略）…自利利他
が初期大乘の菩薩であるとするれば、もっぱら利他に徹したのが大
悲闡提の菩薩であり、これは大乘仏教の究極的な理念を示す菩薩
の姿である。⁽¹⁹⁾

という一般的な大乘仏教史観とが、「自己犠牲」という最も人間の感性に訴えかけてくる「美しい」概念を媒介にして、直接的に結びつき、結果として単純なテクニカル・タームと

しての「自未得度先度他」を必要以上に強調することになつたのではないだろうか。⁽²⁰⁾

だが実際には、道元禪師にとつては「自利」と「利他」は相即なのであり、その論理構造と実践は、全生涯を通じて変化するとはなかつた、と私は考えるのである。

1 石井清純「再び「現成公案」について」『宗学研究』第四一四二頁。

2 角田泰隆「差別を助長した思想的要因に関する私見」『曹洞宗研究員研究紀要』第一九号 二〇五頁。

3 袴谷憲昭「十二卷本『正法眼蔵』撰述説再考」『本覚思想批判』（大蔵出版）三四六～三四七頁。

4 『正法眼蔵』「発菩提心」『道元禪師全集』第二卷（春秋社）三四頁。

5 発心畢竟二不別 如是二心先心難 自未得度先度他 是故我礼初発心 初発已為人天師 勝出声聞及縁覚 如是発心過三界 是故得名最無上（『大般涅槃經』卷第三八『大正新修大蔵經』一 二卷 五九〇頁上。）

6 『正法眼蔵』「発菩提心」『道元禪師全集』第二卷（春秋社）三四頁。

7 同右。

8 同右書 三三五頁。

9 同右書 三三四頁。

10 「初心晩学のともがら」の学仏道者に平易に説き示したものであることが知られる。（河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』（春

秋社) 五三五頁。

11 船岡誠「道元禪師における自利利他の論理構造と冥合の論理」『宗学研究』第二一号。

12 「場」から独立した存在ではないという点において、量子力学における観測者の立場に似ているといえなくもない。

13 『正法眼藏』「発菩提心」『道元禪師全集』第二卷(春秋社) 三三五頁。

14 同右。

15 河村孝道編著『諸本対校永平開山道元禪師行状建擲記』(大修館書店) 七三頁。

16 ちなみに『法集經』に、「我先度一切衆生然後自度。」(『法集經』卷第六「大正新修大藏經」一七卷 六五〇頁上。)とある。

17 拙稿「伝統宗学における「身心脱落」『宗学研究』第四〇号 二八頁。

18 家永三郎「道元の宗教の歴史的性格」『道元思想大系』七(同朋舎出版) 一九三頁。

19 『仏教文化事典』(佼成出版社) 二八頁。

20 宮沢賢治の「童話」が支持される理由を考えればおのずから明白となる。なお「悟り」において「感性」を重んじることの危険性は、既に右拙稿中で指摘済みである。

〈キーワード〉 発心、自利利他、本覚思想

(曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員)

道元禪師における「自未得度先度他」について(星)

新刊紹介

宮家 準著

修験道組織の研究

A5判・一五〇六頁・定価三八、〇〇〇円

春秋社・平成十一年二月二六日